九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

地域共生社会における老人クラブの役割 : 会員の入・退会理由からの検討

張, 乾坤
九州大学大学院人間環境学府 : 博士後期課程

https://doi.org/10.15017/4772292

出版情報：人間科学共生社会学. 11, pp.51-68, 2021-03-31. 九州大学大学院人間環境学研究院
バージョン：
権利関係：

KYUSHU UNIVERSITY

地域共生社会における老人クラブの役割

―会員の入・退会理由からの検討―

張　　乾坤

要　旨

本稿は、福岡県糸島市老人クラブ連合会を対象として実施した調査票調査のデータを用い、老人クラブ会員の入会理由と活動からの退出理由を中心に、老人クラブの会員数減少の原因について考察する。そのうえで、地域づくり、また地域共生社会における老人クラブの果たすべき役割をめぐる検討する。

まず老人クラブの会員数減少の問題に対しては、その対策として新入会員の単なる増加を目指すのではなく、既に入会している高齢者が離脱せず、できるだけ継続的に活動に参加できることを考えるべきであることを指摘した。次に、高齢者は意欲があっても、体力などの面で限界があるため、老人クラブ活動をはじめとする地域での各種事業への参加にあたっては、行政などによる外部支援が必要であることも指摘した。そして、老人クラブは高齢者の団体として、高齢者の実際のニーズに応え、高齢者の立場をふまえ、高齢者の福祉を推進するために活動すべきであることなどを指摘した。

キーワード：老人クラブ、会員数減少、高齢者、地域共生社会・社会参加活動

1　はじめに

日本では近年高齢化率が上昇し続けており、2019年10月１日現在では、28.4% に達した。同年、合計特殊出生率は1.36となり、出生数は過去最少の86万5234人にまで落ち込み、少子化が加速している。少子高齢化がますます深刻となっていくなか、ダブルケアや8050問題をはじめとして、虐待や暴力被害、就職困難、貧困、引きこもり、社会的孤立などのように、ある特定の年齢層や世代に限定される問題はむしろ少なくなり、社会福祉の分野を越えた複合的な課題に直面している世帯も増えてきた。従来の福祉制度は、対象領域を分けて、行政が主な主体として専門的支援を提供してきたが、現在の状況には十分に対応できない状況に陥ってしまった。そこで、世代や分野を越えて、住民、NPO、民間企業そして行政が共に動き、個人や世帯が抱えた困難を早期に発見し、「丸ごと」解決することができる包括的支援体制を厚生労働省は求め

ている。

このような体制の中で、身体的、精神的に「元気」な高齢者が生活相談などの支援を担うことで、担い手である高齢者自身の生きがいや介護予防効果の向上につながる可能性があることも見逃してはいけない。こうした活動の例として、老人クラブ活動がある。この活動は長い歴史を持ち、日本各地に組織が存在している高齢者の団体として、地域における見守り活動のような孤立防止のための事業や、例えば餅つき大会のような多世代交流事業を実施してきた。しかし、老人クラブの会員数とクラブ数は全国で1998年にピークを迎えた後、高齢者人口が増加しているにもかかわらず、会員数は年々減少してきており、老人クラブは存続の危機に直面していると言っても過言ではない。会員数が減っていくと、当然のことながら活動の展開と持続が難しくなるため、地域の期待に応えることが容易ではなくなってしまうのである。

では、なぜ老人クラブの会員数が減少してきたのであろうか、この疑問をめぐる検討を通して、これから老人クラブは地域でどのように、また、どこまでの社会的役割を果たすべきなのか、認知症高齢者や単身高齢世帯等が増加していく中でどのような対策が必要となるのか、といった問題を考える手がかりとしたい。本稿では、福岡県糸島市で実施した老人クラブ会員を対象とした調査票調査のデータを利用し、老人クラブ会員の入会理由と活動からの退会理由の分析をもとに、老人クラブの会員減少の原因などの課題を検討することとしたい。

2　先行研究

2.1　地域共生社会とは何か

前述のように、日本の福祉制度は、高齢者、児童、障害者などの対象ごとに整備されてきたが、個人や世帯の多分野の課題が絡み合い、複雑になっている近年の状況には対応できにくくなっている。これらの状況に対して、2013年に『社会保障制度改革国民会議報告書』が公表された。そのなかでは、「限られた資源を有効に活用するとともに、QOL（Quality of Life）の向上という観点から、様々な生活上の困難があっても、地域の中で、その人らしい生活が続けられるよう、それぞれの地域の特性に応じて、医療・介護のみならず、福祉・子育て支援を含めた支え合いの仕組みをハード面、ソフト面におけるまちづくりとして推進することが必要である」ことが主張され、「各地域において地域の事情を客観的なデータに基づいて分析し」、それを踏まえて「医療・介護の地域包括ケアシステムの構築により、地域ごとに形成されるサービスのネットワークは、高齢者介護のみならず、子ども・子育て支援、障害者福祉、困窮者支援にも貴重な社会資源となり、個人が尊厳を持って生きていくための、将来の世代に引き継げる貴重な共通財産となる」とされる。「このような地域包括ケアシステム等の構築は、地域の持つ生活支援機能を高めるという意味において『21世紀型のコミュニティの再生』といえる」と説明されている。

厚生労働省は「地域全体で支える力を再構築すること」、「すべての人が世代や背景を問わず、

安心して暮らし続けられるまちづくり（全世代・全対象型地域包括支援）」、「全世代・全対象に発展・拡大させ、各制度とも連携して、新しい地域包括支援体制」が必要であるとする。そして、地域共生社会とは、制度・分野ごとの『縦割り』や「支え手」「受け手」という関係を超えて、地域住民や地域の多様な主体が『我が事』として参画し、人と人、人と資源が世代や分野を超えて『丸ごと』つながることで、住民一人ひとりの暮らしと生きがい、地域をともに創っていく社会を目指すものであるとした。

柴崎ら（2019）は、住民や福祉関係者・関係機関が連携することで、地域住民の抱える生活課題を把握し、解決するという地域共生社会の理念には同意しうる一方、公的責任の後退が認められるため、地域や住民主体を強調し過ぎるこの理念への不信感を指摘している。地域の住民は地域の生活課題により早く気付くことができるため、身近な人や機関・団体と連携して早期に解決することができれば、望ましいことだと思う。しかし、個々の地域住民には、仕事や学業、家事、介護や看護などの諸活動を行わなくてはならない場合が少なくなく、まず時間面の限界がある。そして、すべての地域住民が必要な知識や技術、資格などを持っているわけではないため、確実に課題を発見し、解決することができるとは限らない。それでは、「残された」地域課題は誰がどのように対応すればよいのだろうか。このように、あまりにも地域課題の解決を地域に求めすぎると、住民の負担になる可能性が高く、場合によっては適切な解決につながらず、不適切な状況に陥る恐れもあると考えられる。

以上をまとめると、介護保険制度の導入と、その維持を目指す地域包括ケアシステムの構築という社会保障制度改革と同時に、新たな地域「コミュニティ」、つまり「地域共生社会」の創出という２の政策目標があるが、地域包括ケアシステムは地域共生社会の制度的基礎と言えるかもしれない。いずれにせよ、この２つの政策目標の交点に、地域社会における様々な社会参加活動への期待が登場してきたとも考えられる。

2.2　老人クラブの実態

日本の老人クラブは、戦後、草創期における先覚者による運動と社会福祉協議会（以下「社協」と略称する）の協力によって日本各地に広がってきた。全国老人クラブ連合会（以下「全老連」と略称する）（1993）によれば、戦後の1946年に千葉県八日市場町で結成された「米倉老人クラブ」より、全国で老人クラブ創設が始まった。1962年４月５日に、全老連結成大会が開催され、全老連が結成された。その後、老人クラブの組織、運営、そして財政の整備が進み、組織の基本的あり方が策定され、老人クラブが日本全国で発展した。図１のように、現在、小学校区などの小地域ごとの単位クラブを核に、市区町村、都道府県・指定都市、全国のレベルに老人クラブ連合会を組織している。

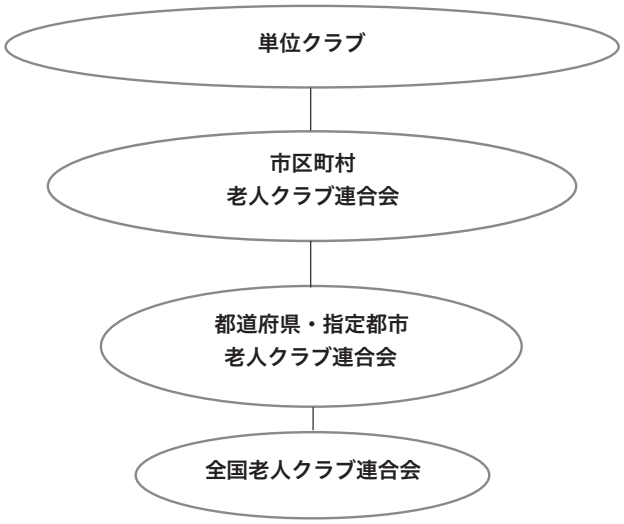


図1　老人クラブの組織

出典：全国老人クラブ連合会（2014）『老人クラブリーダー必携（平成26年度版）』、一部変更。

全老連の資料によると、1998年に老人クラブの会員数と単位クラブ数はピークを迎え、その後、年々減少してきた。全老連は2010年度から初めての加入促進を目指す取り組みである「老人クラブ活性化３カ年計画」を推進した。その後、2014年度から、全老連は「100万人会員増強運動」の５カ年計画に取り組んできた。全老連（2020）によれば、この５カ年運動終了までに、市区町村段階では、会員増加、現状の会員数を維持しているクラブがあるが、全国レベルでは純増に転じたことがないという。2019年３月月末現在、全老連には95,823単位クラブを持ち、会員数は5,245,723人である。

2.3　老人クラブの活動について

高野和良（2002）は、高齢者の社会参加に関する研究で、老人クラブの活動が高齢者のニーズから外れたことが会員数減少の原因であることを示唆したうえで、老人クラブが活性化するために、介護予防のような高齢者の生活実態に即した内容を新たに活動に加える、あるいは既存の地域集団との協働を通して重層的活動を展開するという提案をしている。高野（2003，2011，2012）はまた、老人クラブ会員数の減少の原因について、65～74歳の高齢者の加入抑制に加えて、人口減少と高齢者自身の加齢によってそもそも参加できる人が減少したという人口学的変化があることを指摘した。

辻正二（2002）は、高齢者の集団参加と社会的ネットワークに関する研究で、老人クラブの加入率及び活動の参加率、さらに、老人クラブに親しみを持っている比率も、農村部を抱える郊外より、都心部のほうが高いことを明らかにした。そして、他の年齢区分の高齢者と比べて、75～79歳の高齢者が最も老人クラブを好んでいること、高齢者核家族世帯の高齢者が老人クラ

ブを好み、高い参加率を示すことを明らかにしている。

佐藤秀紀ら（2002）は、高齢者の社会活動を、社会的、個人的、学習的という３つの領域に整理して検討し、保健学の立場から、高齢者の活動能力を研究した。そのなかで、佐藤らは、老人クラブの世話役のような共同活動参加が地域社会の維持のために相当な役割を果たしており、高齢者個人にとっても老人クラブが地域社会において新たな居場所を見出すことに役立っていると指摘した。

岡本秀明（2014）は、社会福祉学の立場から、高齢者のインフォーマルな社会的ネットワークについての研究で、新たな友人・知人の獲得のために、特に老人クラブは有効で重要であると指摘した。また、老人クラブが全国の小地域に点在する歴史ある貴重な資源であることを再認識し、効果的な活用方法やクラブの魅力を再検討し、クラブ数や会員数を増加させるための努力が期待されるとも論じた。

以上の研究では、老人クラブの会員数減少についても、人口学的な要因や単位老人クラブあるいは単位老人クラブ活動の「魅力」が不足しているといった原因が論じられているが、いずれも一般的に考えられる仮説であり、これらの原因は氷山の一角にすぎないと思う。そして、老人クラブと老人クラブの活動が高齢者個人の活動能力の向上や地域社会の維持などにとって、重要な機能を持っていることも議論されてきたが、本稿の冒頭で指摘したように、分野を越えた課題が増えている状況のなか、老人クラブがどのような対応を行うべきかについては、いまだ十分に考察されていないように思う。そのため、本稿では、老人クラブの会員数減少の要因を地域共生社会のあり方も考慮しながら考えてみたい。

3　研究の概要

3.1　調査の概況

2015年８月から、当時の糸島市シニアクラブ連合会（以下「糸島市老連」[1)]と略称する）事務局長の理解を得て、糸島市老連の会議の傍聴や、活動見学の機会を得た。これらを継続しつつ、社会調査実施の検討を進めた。2017年に、「地方都市における老人クラブの実態に関する調査」という調査票調査を実施し、老人クラブ会員の意見を探り、老人クラブ活動の現状と課題を把握したうえで、これからの老人クラブ活動のあり方を検討することを目指した。

表1　糸島市単位老人クラブ数の推移

年	2010	2011	2012	2013	2014	2015	2016	2017	2018	2019	2020
単位クラブ数	122	116	113	111	104	101	102	106	107	107	109

出所：糸島市役所介護・高齢者支援課のデータおよび糸島市老連総会の資料より筆者作成。

糸島市老連は前述の全老連の「老人クラブ活性化３カ年計画」と「100万人会員増強運動」の５カ年計画に基づいて活動を継続してきた。そうした経緯のなかで、かつて地域老人クラブ連合会から脱退した単位クラブ（A 親和会[2)]）が2015年に復帰した。A 親和会が復帰したため、糸島市老連の単位クラブ数は増えることになる。これは糸島市老連が成立してから初めての単位クラブ数増加だった（表１）。こうした事例は必ずしも一般的ではないため、A 親和会の会長に脱退や復帰などの経緯について聞き取り調査を行った。聞き取りで得られた活動復帰の要因などの知見を調査票調査の分析にあったて参考にするために、今回の社会調査の対象は、A 親和会に所属している C 校区シニアクラブ連合会（以下「C 校区老連」と略称する）を対象として選択した。

社会調査の概要は以下の通りである。2017年２月１日に、C 校区老連の理事会で、出席した単位クラブのリーダーに、調査票500票の配布を依頼した。回収期限は2017年２月28日とし、2017年３月31日現在までの回収数は212票（回収率は42.4％）であった。なお、C 校区老連は五つの単位クラブがあるが、A 親和会からは調査票が回収できなかった。

3.2　分析の流れ

聞き取り調査の結果をもとに、老人クラブの会員数が年々減少した理由について、入口である新入会員の人数の減少と、出口である退会者の人数が増えたことといった２つの側面から検討する。

ここで会員数について、整理しておきたい。まず、個人が病気や入院などが原因で老人クラブの活動に参加しなくなった場合は、退会ではなく活動休止となるため、会員数の増減には影響しないが、会員が死亡した場合や、A 親和会の事例のように単位クラブ全体が老人クラブ連合会から脱退した場合には、会員数は減少する。会員の死亡はやむを得ない事態であるが、A 親和会の事例から見ると、単位クラブの脱退の理由は単位クラブと地域の他の団体との関係などが主な原因であるという[3)]。

本稿では会員の入会理由、会員にもかかわらず活動にほとんど参加していないという人（以下「休眠会員[4)]」と略称する）となった理由などを通して会員数減少の理由を考察したい。

4　社会調査結果の検討

4.1　入会理由の実態

4.1.1　入会理由

まず、本調査の単純集計結果をもとに検討を行う。図２に示したように、「あなたが、老人クラブに入会した理由は、なんですか（複数回答）」について、「当時老人クラブの役員であった友人やご近所から誘われた」が59.5% で、最も多かった。次に、「地域で人間関係を作るために」が24.9% を占めている。その次に、「当時老人クラブの役員ではない会員の友人やご近所から誘

われた」が19.0% となっている。４番目は「老人クラブが主催する活動に参加するため」という活動参加をめざした理由（15.6%）である。

入会理由から見れば、老人クラブの会員、特に役員が未参加者を誘うことが、会員数を増やすために大切な役割を果たしていることが分かる。そして、約４分の１は「地域で人間関係を作るために」と回答していることからは、地域には様々な団体・組織があるにもかかわらず、老人クラブが選ばれていることも分かる。このことは、高齢者が仲間を探したり、社会的孤立を避けたりするにあたって、老人クラブが重要な経路となっていることが推測される。また、「老人クラブが主催する活動に参加するため」に入会した人も少なくはないことから、近年、地域福祉活動としての、ふれあい・いきいきサロン活動がより広がるなかでも、老人クラブの活動が高齢者にとってある程度の存在感を持っているともいえよう。

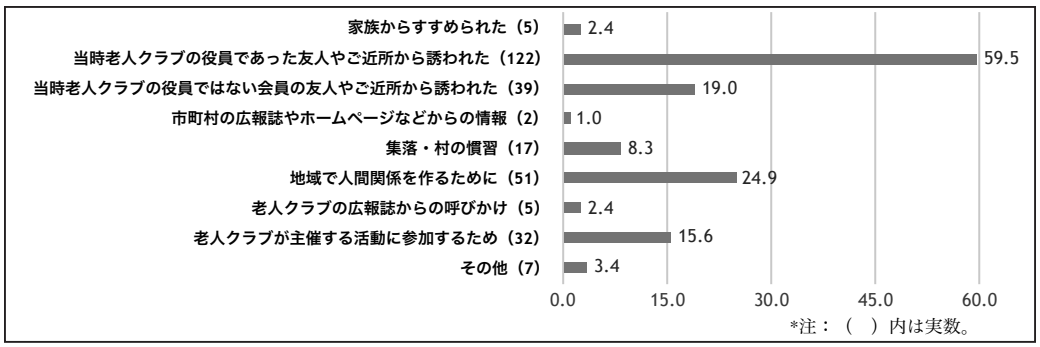


図２　入会理由

4.1.2　休眠会員となった理由

4.1.2.1　回答者本人が休眠会員

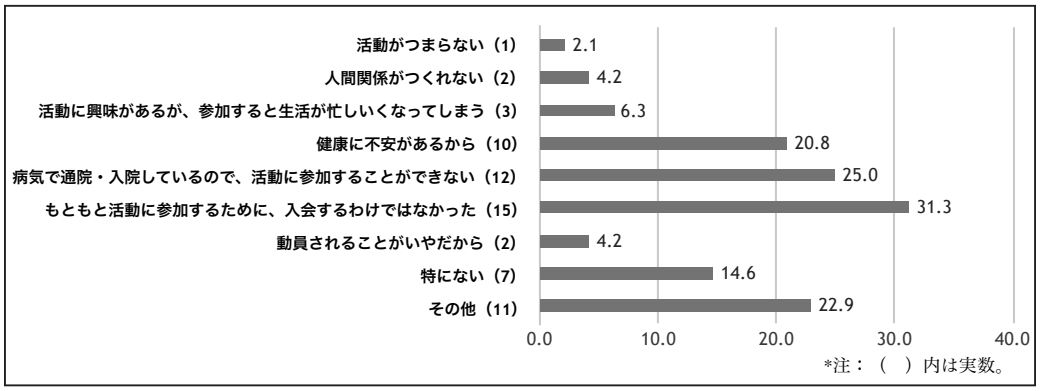


図３　本人が休眠会員になった理由

回答者本人が休眠会員（回答した時点まで一年間老人クラブの活動に参加したことがない人）になった理由を見よう。図３から分かるように、老人クラブ活動に参加しなくなった理由として、「もともと活動に参加するために、入会するわけではなかった[5)]」が31.3% で、最も多数である。次に、「病気で通院・入院しているので、活動に参加することができない」が25.0% で、第２位となっている。次いで、第３位は「その他」で22.9% となっている。次いで「健康に不安があるから」が20.8% となっている。

表２　活動に参加しなくなった理由 ── その他（11）

H13年で行政区引退
介護施設に入所していた夫の世話で気分的余裕がなくなった
老令（ママ）になった為
老令（ママ）の為
体が自由に動かない
仕事のため
仕事をしているので時間等が合わない
他のサークル活動で多忙
他の活動とかさなるから
スポーツジムでいいと思った
主人が加入しているのでついでに

出所：調査票の自由記入のデータにより筆者作成。

「その他」の回答は11件であった。表２で示したように、健康面の原因が多く認められる。そして、仕事や介護などのために参加する時間が確保できないといった時間面での制約を理由とする回答も多かった。加齢とともに、気力があっても体力が追いつかなくなってしまい、活動に参加することが難しくなるのは避けられない部分はもちろんあるが、それだけに留まらない理由があることが分かる。

「もともと活動に参加するために、入会するわけではなかった」が最も多くなっている理由を、「入会理由」の結果を加味しながら検討したいと思う。まず、老人クラブの会員である友人や近所の人から入会の依頼や勧誘を無下に断ることが難しく、仕方なく入会しただけで、活動自体に興味がない人が多いと考えられる。次に、これまでの仕事や移住などがよって、地域（C校区）との繋がりがあまりないために、老人クラブにつながりづくりを期待して入会した人々も想定できるが、こうした人々は、老人クラブ加入によってつながりを持つことができたために、それ以上活動に参加する必要を感じないという場合もあるかもしれない。

4.1.2.2　休眠会員になる理由

老人クラブの休眠会員となった理由は様々だと考えられるが。実際に活動に参加している会

員が減っていくと、老人クラブは有名無実になってしまい、高齢者のニーズや地域社会の期待に応えることもできなくなってしまうだろう。ゆえに、休眠会員になる理由を明らかにすることは、老人クラブ活動の実態と会員の意識をより明確に把握することにつながり、老人クラブ活動充実の方向性を検討することにも役立つと思われる。

図４に示したように、知り合いが休眠会員になった理由について、「病気で通院・入院しているので、活動に参加することができない」29.0％で、最も多かった。「健康に不安があるから」は第２位で、27.5% となっている。次に、第３位は「分からない」で、26.7% である。「もともと活動に参加するために、入会するわけではない」は22.1% で、第４位となっている。このほかには、「人間関係がつくれない」（18.3%）、「活動がつまらない」（13.0%）、「動員されることがいやだから」（12.2%）などとなっている。

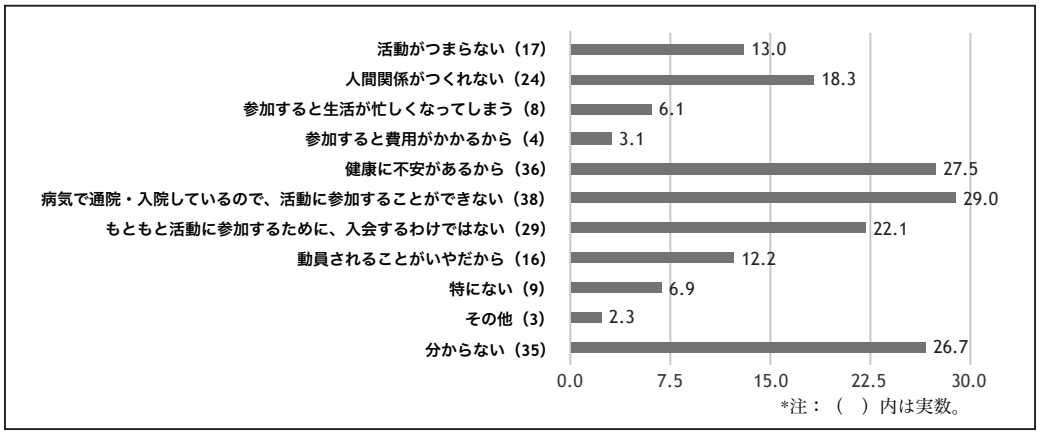


図４　知り合いが休眠会員になった理由

「分からない」が第３位となったのは、他人のことを勝手に推測し、理由付けしたくないというように考えた人が多いためと思われるが。「分からない」を除いてみれば、休眠会員となった理由として、身体的、健康面の原因は特に多い一方、もともと活動に参加したくて入会するわけではないという理由も少なくない。

4.1.3　会員数減少の理由

ここでは、会員減少実態の認知度、その理由などについて確認したい。まず、「糸島市で、老人クラブの会員数が年々減少してきていることをご存知ですか」について、「知らない」が（50.3%）で、「知っている」（49.7%）よりもわずかに多くはあるが、ほとんど差はなく、それぞれ全体の約半数を占めている。つまり、半数の会員は自分の属している組織の危機を認識していないことが分かる。

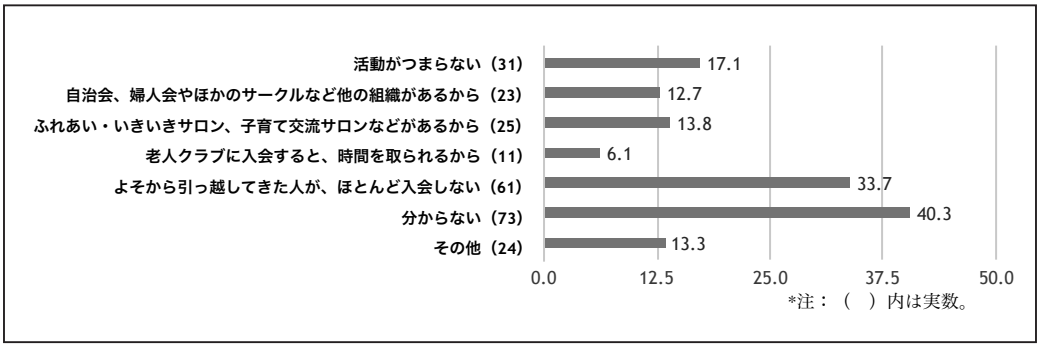


図５　会員数減少の理由

そして、図５から分かるように、「老人クラブ会員数減少の理由とは何だと思いますか（複数回答）」について、「分からない」が40.3% で最も多かった。「よそから引っ越してきた人が、ほとんど入会しない」は33.7% で第２位となっている。次いで、「活動がつまらない」（17.1%）、「ふれあい・いきいきサロン、子育て交流サロンなどがあるから」（13.8%）、「その他」（13.3%）、「自治会、婦人会やほかのサークルなど他の組織があるから」（12.7%）などである。

会員数が減少している理由について「分からない」が最も多かった要因は、たとえ老人クラブの会員であったとしても、老人クラブへの愛着や関与の度合いが少なければ、老人クラブの会員数が減少しても自分自身の生活にはあまり影響がないため、関心がないという人が多いのかもしれない。そして、「よそから引っ越してきた人が、ほとんど入会しない」が第２位となっているが、それは会員数減少のような事態を自分自身の活動等に問題があると考えるのではなく、つながりが弱い他者に問題があるとする傾向が少なくないのではないかと思われる。

4.2　入会理由等と属性との関係

4.2.1　入会理由

まず、入会理由について入会年齢別に見る（表３）と、どの年齢層でも、「役員からの誘い」または「地域での人間関係を作るため」という２つが主な入会理由である。

そして、入会理由の男女差はあまりなく、第１位となったのは「役員の誘い」であり、次に「人間関係を作るため」は第２位、「役員ではない会員の誘い」は第３位、「活動に参加するため」は第４位となった。

表３　入会理由 ― 年齢別

			入会理由（複数回答）									合計
			家族からすすめられた	当時老人クラブの役員であった友人やご近所から誘われた	当時老人クラブの役員ではない会員の友人やご近所から誘われた	市町村の広報誌やホームページなどからの情報	集落・村の慣習	地域で人間関係を作るために	老人クラブの広報誌からの呼びかけ	老人クラブが主催する活動に参加するため	その他	
入会年齢	60歳未満	度数	0	3	0	0	1	0	0	0	0	4
		%	0.0%	75.0%	0.0%	0.0%	25.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	
	60~64歳	度数	0	30	7	0	4	10	0	8	0	43
		%	0.0%	69.8%	16.3%	0.0%	9.3%	23.3%	0.0%	18.6%	0.0%	
	65~69歳	度数	1	36	12	1	7	17	1	9	3	64
		%	1.6%	56.3%	18.8%	1.6%	10.9%	26.6%	1.6%	14.1%	4.7%	
	70~74歳	度数	4	39	14	1	3	18	2	11	3	67
		%	6.0%	58.2%	20.9%	1.5%	4.5%	26.9%	3.0%	16.4%	4.5%	
	75歳以上	度数	0	10	4	0	1	4	2	2	1	18
		%	0.0%	55.6%	22.2%	0.0%	5.6%	22.2%	11.1%	11.1%	5.6%	
	無回答	度数	0	4	1	0	1	2	0	2	0	8
		%	0.0%	50.0%	12.5%	0.0%	12.5%	25.0%	0.0%	25.0%	0.0%	
合　計		度数	5	122	38	2	17	51	5	32	7	204

4.2.2　休眠会員になった理由

4.2.2.1　回答者本人が休眠会員

表４　本人が休眠会員になった理由 ― 性別

			休眠会員になった理由（複数回答）									合計
			活動がつまらない	人間関係がつくれない	活動に興味があるが、参加すると生活が忙しいくなってしまう	健康に不安があるから	病気で通院・入院しているので、活動に参加することができない	もともと活動に参加するために、入会するわけではなかった	動員されることがいやだから	特にない	その他	
性別	男性	度数	0	2	3	4	5	9	1	4	4	25
		%	0.0%	8.0%	12.0%	16.0%	20.0%	36.0%	4.0%	16.0%	16.0%	
	女性	度数	1	0	0	6	7	6	1	3	7	23
		%	4.3%	0.0%	0.0%	26.1%	30.4%	26.1%	4.3%	13.0%	30.4%	
合計		度数	1	2	3	10	12	15	2	7	11	48

表４から分かるように、本人が「休眠会員」となった理由のうち最も多かったのは、男性が「もともと活動に参加するために入会するわけではなかった」であり、女性が「病気で通院・入院しているので、参加することができない」である。

次に、老人クラブの役員である経験の有無から見る（表５）と、役員の経験がある人が活動に参加しなくなった理由はほぼ健康の問題である。それに対して、役員の経験がない人の理由には「もともと活動に参加するために、入会するわけではなかった」が最も多くなっている。

最後に、経済的余裕があるかどうかは、活動に参加しなくなったことに対してほとんど差はなかった。また、健康上の問題で日常生活への影響が「ない」人は、休眠会員になった理由のなかで「もともと活動に参加するために入会するわけではなかった」が多くなり、「ある」と答えた人の理由は「病気で通院・入院しているので、活動に参加することができない」が多かった。

表5　本人が休眠会員になった理由 ― 老人クラブ役員の経験の有無

			休眠会員になった理由（複数回答）									合計
			活動がつまらない	人間関係がつくれない	活動に興味があるが、参加すると生活が忙しいくなってしまう	健康に不安があるから	病気で通院・入院しているので、活動に参加することができない	もともと活動に参加するために、入会するわけではなかった	動員されることがいやだから	特にない	その他	
老人クラブの役員を務めたことがあるか	はい	度数	0	0	0	2	2	0	0	2	1	6
		%	0.0%	0.0%	0.0%	33.3%	33.3%	0.0%	0.0%	33.3%	16.7%	
	いいえ	度数	1	1	3	6	6	14	2	5	7	33
		%	3.0%	3.0%	9.1%	18.2%	18.2%	42.4%	6.1%	15.2%	21.2%	
合計		度数	1	1	3	8	8	14	2	7	8	39

4.2.2.2　回答者の知り合いが休眠会員

表6　知り合いが休眠会員になった理由 ― 老人クラブ役員の経験の有無

			休眠会員になった理由（複数回答）											合計
			活動がつまらない	人間関係がつくれない	参加すると生活が忙しくなってしまう	参加すると費用がかかるから	健康に不安があるから	病気で通院・入院しているので、活動に参加することができない	もともと活動に参加するために、入会するわけではない	動員されることがいやだから	特にない	その他	分からない	
老人クラブの役員を務めたことがあるか	はい	度数	5	8	3	2	13	12	10	7	1	0	7	33
		%	15.2%	24.2%	9.1%	6.1%	39.4%	36.4%	30.3%	21.2%	3.0%	0.0%	21.2%	
	いいえ	度数	7	11	3	2	11	14	14	4	7	3	21	65
		%	10.8%	16.9%	4.6%	3.1%	16.9%	21.5%	21.5%	6.2%	10.8%	4.6%	32.3%	
合計		度数	12	19	6	4	24	26	24	11	8	3	28	98

「知り合いが休眠会員」になったことについて、表6に示したように、役員経験がある人は健康面の問題が最も多い原因となっている。一方、役員経験がない人は「もともと活動に参加するために、入会するわけではない」の方がより多くなった。その他、役員経験がない人の回答では「活動がつまらない」と「動員されることがいやだから」が第5位と第6位になったが、役員経験がある人では「活動がつまらない」と「動員されることがいやだから」が第6位と第5位となった。

表7　知り合いが休眠会員になった理由 ― 現在老人クラブ役員であるかどうか

			休眠会員になった理由（複数回答）											合計
			活動がつまらない	人間関係がつくれない	参加すると生活が忙しくなってしまう	参加すると費用がかかるから	健康に不安があるから	病気で通院・入院しているので、活動に参加することができない	もともと活動に参加するために、入会するわけではない	動員されることがいやだから	特にない	その他	分からない	
現在は老人クラブの役員であるか	はい	度数	7	8	2	1	13	17	9	10	0	0	6	38
		%	18.4%	21.1%	5.3%	2.6%	34.2%	44.7%	23.7%	26.3%	0.0%	0.0%	15.8%	
	いいえ	度数	9	13	4	2	17	17	18	6	7	2	24	77
		%	11.7%	16.9%	5.2%	2.6%	22.1%	22.1%	23.4%	7.8%	9.1%	2.6%	31.2%	
合計		度数	16	21	6	3	30	34	27	16	7	2	30	115

そして、現在役員であるかどうかをみると見る（表７）と、現役の役員が選んだ理由は、「動員されることがいやだから」が「もともと活動に参加するために、入会するわけではない」をわずかに上回り、健康面の理由に次ぐ第３位となったが、過去の役員経験者が選んだ理由の中では多くの支持を集めてはいなかった。

4.2.3　会員減少の理由

表8　会員減少の理由 ― 老人クラブ役員の経験の有無

			会員減少の理由（複数回答）							合計
			活動がつまらない	自治会、婦人会やほかのサークルなど他の組織があるから	ふれあい・いきいきサロン、子育て交流サロンなどがあるから	老人クラブに入会すると、時間を取られるから	よそから引っ越してきた人が、ほとんど入会しない	分からない	その他	
老人クラブの役員を務めたことがあるか	はい	度数	7	5	9	4	17	11	6	39
		%	17.9%	12.8%	23.1%	10.3%	43.6%	28.2%	15.4%	
	いいえ	度数	18	10	9	6	29	49	12	99
		%	18.2%	10.1%	9.1%	6.1%	29.3%	49.5%	12.1%	
合計		度数	25	15	18	10	46	60	18	138

会員減少の理由について、まず役員経験の有無から見てみよう。表８に示したように、役員経験がない人の回答には、「分からない」が最も多く、「よそから引っ越してきた人が、ほとんど入会しない」と「活動がつまらない」が第２位と第３位となった。これに対して、役員の経験がある人は「よそから引っ越してきた人が、ほとんど入会しない」がもっとも多く、次いで「分からない」、「ふれあい・生き生きサロン、子育て交流サロンなどがあるから」となった。

表9　会員減少の理由 ― 現在老人クラブ役員であるかどうか

			会員減少の理由（複数回答）							合計
			活動がつまらない	自治会、婦人会やほかのサークルなど他の組織があるから	ふれあい・いきいきサロン、子育て交流サロンなどがあるから	老人クラブに入会すると、時間を取られるから	よそから引っ越してきた人が、ほとんど入会しない	分からない	その他	
現在は老人クラブの役員であるか	はい	度数	9	8	11	3	15	6	7	38
		%	23.7%	21.1%	28.9%	7.9%	39.5%	15.8%	18.4%	
	いいえ	度数	19	12	13	8	38	57	12	119
		%	16.0%	10.1%	10.9%	6.7%	31.9%	47.9%	10.1%	
合計		度数	28	20	24	11	53	63	19	157

そして、表９に示したように、現役の役員では「ふれあい・いきいきサロン、子育て交流サロン」の存在が「よそから引っ越してきた人が、ほとんど入会しない」に加えて、会員減少の主な理由と考える人が多かったが、過去の役員は「活動がつまらない」ことがより大きな理由であると回答している。

最後に、性別でみると、男性の回答で最も多かったのは「よそから引っ越してきた人が、ほとんど入会しない」であり、次は「分からない」、第３位は「活動がつまらない」となった。女性で最も多かったのは「分からない」であり、次に「よそから引っ越してきた人が、ほとんど入会しない」となり、第３位は「ふれあい・いきいきサロン、子育て交流サロンなどがあるから」となった。

4.3　考察

ここまで、「地方都市における老人クラブの実態に関する調査」から、老人クラブの加入理由、参加しなくなった理由、休眠会員に対する認識、会員数減少の理由という４つの質問の結果を中心に検討してきた。

まず、入会理由について、性別や年齢の要因に関係なく、「役員からの誘い」と「地域で人間関係を作るため」が主な理由であった。つまり、新入会員数を増やすことを考えるのであれば、より力を入れるべきことは、老人クラブの会員、特に役員が未参加者に対する勧誘を行うことと、地域で他の年齢層の団体・組織と共同し、様々な地域行事に参加することなどが必要になると思われる。また、「老人クラブが主催する活動に参加するため」に入会した人も少なくはないため、近年サロン活動が広がる中でも、老人クラブ活動が高齢者からの支持を完全に失ってしまったわけではないと言えるだろう。

次に、本人が休眠会員になる理由は、男女差がわずかに認められる一方で、他の属性別の差はあまりなく、健康面の要因と「もともと活動に参加するために、入会するわけではない」に回答が集中した。ただし、気になる点が一つある。それは、知り合いが休眠会員になった理由について、「動員されることがいやだから」と回答した人が、過去に役員経験のある人と比較して、現役の役員の方がその割合が多くなった点である。つまり、５カ年にわたる「100万人会員増強運動」が展開されつつあることで、未加入者への勧誘や活動への参加要請といった活動が、一般会員だけではなく、役員にとっても、負担になっている可能性がある。

最後に、回答者の半数は老人クラブの会員数が近年減少していることを知らない状態であり、老人クラブの会員減少の理由について「分からない」、「よそから引っ越してきた人が、ほとんど入会しない」を多く選んでいる。これは、多くの老人クラブ会員に老人クラブに対する能動的な意識がなく、関心を持っていない現実を反映しているといえるかもしれない。また、過去に役員だった人と比べると、現役の役員の方が「ふれあい・いきいきサロン、子育て交流サロンなどがあるから」をより多く選択した。これは、近年その活動が注目されているサロンを、現役の役員がライバル視している一方、老人クラブ組織の危機を感じているためであろう。

5　知見と結論

本稿の背景には、地域共生社会を実現し、それを支える取り組みにおいて老人クラブへの期

待が大きいなかで、実際には、老人クラブは近年会員数が減少し、活動の存続も懸念される状況になっていることがある。既存の高齢者団体のなかで、最も参加者が多い老人クラブが地域において果たす役割に期待するのであれば、会員減少の傾向を抑えることがまず課題の一つと考えられる。ゆえに、本稿では、福岡県糸島市老人クラブ連合会で行った「地方都市における老人クラブの実態に関する調査」の回答結果を用いて、老人クラブ会員の入会理由と活動からの退出理由を中心に、老人クラブの会員減少の原因などの課題を考察してきた。そのうえで、以下の３点について、さらに検討したいと思う。

第一に、老人クラブの会員数の増加の意味をめぐって考えたい。前述のように、役員の勧誘、および老人クラブが地域行事に協力することで、未加入者を老人クラブに入会させることができれば、会員数の増加も不可能ではない。しかし、統計上会員の数が増加したからといって、老人クラブの活動が以前より会員にとって楽しく、内容が豊かで、地域からの要請にうまく答えられるものになるとは、必ずしもいえないであろう。本調査の回答者は、約４分の１が一年以上老人クラブの活動に参加していなかった「休眠会員」である。つまり、重視されるべきは名簿上の会員数ではなく、実際に活動している会員数である。活動の内容、範囲、活動時間などを検討するにあたっては、休眠会員ではなく、実際の参加者の意向が重要視されるべきであろう。よって、新入会員の単純な数字上での増加だけではなく、既に入会している高齢者が離脱せず、できるだけ継続的に活動に参加できるための対策や方法を、改めて検討するべきである。

第二に、地域づくりなどの担い手として期待される老人クラブをめぐる問題である。確かに、地域共生社会を実現するために、高齢者の団体である老人クラブを含めて、地域の各主体が協働することは望ましい。しかし、他の年齢層と比べると、高齢者はもともと加齢によって体力的にも限界があり、加えて家族の介護などで時間や気力も奪われるといった限界を抱えている。よって、調査結果からもわかるように、高齢者自身に地域の各事業に参加する意欲があっても、難しい場合が少なくない。そこで、参加を実現するための外部支援が必要になる。この外部支援とは、老人クラブが何かを計画したり、実施したりする際に、行政や社協、高齢者施設などの地域福祉活動に関係する各種組織や機関がアウトリーチ的な支援を、老人クラブに対して提供することも一例として考えられる。これによって、老人クラブを軸として、地域資源の連携を実現するということである。とりわけ行政は、地域の抱える課題を解決するのに必要な主体かつ資源の一つとして老人クラブを位置付けていくことも必要なのではないか。

第三に、老人クラブの果たすべき役割について考えよう。先の第一点と第二点で指摘したように、老人クラブが活動に実際に参加している会員が、離脱しないようにするための対策や方法を検討したり、能動的に地域における高齢者に関する課題を把握し、実施することは、もちろん重要である。そして、これらの点は、いずれも、老人クラブが、現在、そしてこれからどのような役割を果たすべきかと関係していると考えられる。誕生期の老人クラブは、戦後の荒廃した日本社会で、不安と恐れを感じた「孤独に陥りがちな高齢者たちの親睦の場として」（全

老連 1993）始まったのである。当時の老人クラブは高齢者が抱えている困難を把握した上で、「老友が集まって楽しみ、生きがいを高める」ことと「行政や一般社会に働きかけ、老人福祉の世論を高める」ことを目的にした。現在の老人クラブは、地域や社協、行政などからの要請を受け、依頼された活動を行うことが、その実態となっているとも言える。特に近年、地域において各種のサロンやサークルが活発に活動をしているなか、老人クラブ自体が、独自の活動内容をもって活動を行うという特徴がますます薄くなってしまい、存在意義が問われつつある。そこで、老人クラブは、地域の現実、つまり高齢者とその同居者がどのような問題を抱え、何を求めているのか、いかなる助けあいや支援がより効果的であるかを探り、会員自身の議論と合意に基づき、高齢者の立場から対策を提言したり、企画立案を行うことによって、高齢者の福祉を推進するという老人クラブの特徴と価値を取り戻す必要がある。そうでなければ、老人クラブの存続をめぐる危機は回避できず、老人クラブもその１つの主体として期待されている地域共生社会の実現も難しくなってしまう。

最後に、見落としてはいけないのは、必ずしも全ての老人クラブが共通の形式で、決まった内容の活動をすることが求められているわけではないということである。各単位クラブは独自の活動内容を検討し、活動するべきである。また、老人クラブが果たすべき役割は、第一に高齢者の実際のニーズに応えることである。地域の高齢者が望んでいることであれば、どんな細やかなことでもすべきこととなる。例え参加者が３、４人の茶話会であっても、高齢者が楽しんでいる限り、それは老人クラブがすべきことであると思う。

本稿は、福岡県糸島市を調査対象地域としているが、住民の多くが農林漁業に従事している地域や、会社員、公務員で構成される均質的な地域と比較すると、その両者が混住する当地域の老人クラブ活動には特有の傾向が認められるであろう。ゆえに、以上の指摘は本調査対象地域の糸島市の一部という限定的な地域でのみ成り立つものとも言える。これに対しては、今後、糸島市と異なる地域で比較調査を行い検証したい。

注

1）2010年に、市区町村合併によって糸島市は発足した。その時、糸島市老人クラブ連合会は設立され、2013年「糸島市シニアクラブ連合会」へと名称を変更した。本稿は「糸島市老連」の略称を使っている。

2）この単位クラブは糸島市老連に復帰して、正式名称を「H シニアクラブ」に変更したが。復帰する前には「A 親和会」の名称を使っていた。筆者は他稿でこの単位クラブの事例を取り上げた時、「A 親和会」の名称を使った。研究対象の名前を統一するために、本稿も「A 親和会」を使う。

3）A 親和会は会員が多く農業をしており、小学校の田植えを地域での居場所や能力を発揮する機会として重視していた。PTA はメンバーが多く農作業についての知識がなく、田植え

を余暇として行うイベントのように扱ってしまっていたが、田植えへの参加を小学校・小学校の運営委員会により期待されていた。このように、A 親和会は、C 小学校の田植えにおける主体的役割を失ってしまい、会員のプライドが傷つくこととなってしまった。このコンフリクトはきっかけとなり、A 親和会は2003年に C 校区老連から脱退した。

4）聞き取り調査対象者の一人は、老人クラブの会員名簿に登録したが、クラブの活動にほとんど参加していない人に対して、「幽霊会員」との言葉を使った。活動において姿が見えないということを表す場合、「幽霊」という表現は、理解しやすい。しかし、「休眠」は一時期眠っていてまた起きるとの意味で、現在活動していない会員が今後活動に参加することへの期待を含めて、より積極的なイメージと考えている。ゆえに、本稿は「休眠会員」を用いている。

5）「もともと活動に参加するために、入会**する**わけではなかった」は、日本語として、「もともと活動に参加するために、入会**した**わけではなかった」の方が自然だが。実際の調査票では「入会**する**」として調査を行っているので、本稿では「入会する」としておく。

文　　献

官邸，2013，『社会保障制度改革国民会議報告書』https://www.kantei.go.jp/jp/singi/kokuminkaigi/pdf/houkokusyo.pdf，2021年１月18日取得

厚生労働省，2015，『誰もが支え合う地域の構築に向けた福祉サービスの実現　新たな時代に対応した福祉の提供ビジョン』https://www.mhlw.go.jp/file/05-Shingikai-12201000-Shakaiengokyokushougaihokenfukushibu-Kikakuka/bijon.pdf，2021年１月17日取得

――――――，2017，『「地域共生社会」の実現に向けて（当面の改革工程）』https://www.mhlw.go.jp/file/04-Houdouhappyou-12601000-Seisakutoukatsukan-Sanjikanshitsu_Shakaihoshoutantou /0000150632.pdf，2021年１月18日取得

内閣府，2020，『令和２年版高齢社会白書』https://www8.cao.go.jp/kourei/whitepaper/w-2020/html/zenbun/index.html，2021年１月７日取得

岡本秀明，2014，「地域における高齢者のインフォーマルな社会的ネットワーク形成に関連する要因」『社会福祉学』一般社団法人日本社会福祉学会，55(2):11-26.

全国老人クラブ連合会，1993，『全老連三十年史』.

――――――――――，2014，『老人クラブリーダー必携（平成26年度版）』.

――――――――――，2020，『会員加入促進の取り組み事例集』http://zenrouren.com/siryou/pdf/2003_1.pdf，2021年１月６日取得

柴崎祐美・細川瑞子・田辺和子，2019，「地域共生社会実現への期待と課題：内藤論文「都市コミュニティの現在と地域福祉」に関連して（追悼論文内藤辰美先生を偲んで）」『社会福祉』日本女子大学社会福祉学会，第60号：105-117.

高野和良，2002,「高齢社会と社会参加」『ソーシャルワーク研究』相川書房，28(1)：32-8.
————，2003,「高齢社会における社会組織と生きがいの地域性」『生きがい研究』長寿社会開発センター，第９号：69-89.
————，2008,「地域の高齢化と福祉」堤マサエ・徳野貞雄・山本努編，『地方からの社会学』学文社，118-39.
————，2011,「過疎高齢社会における地域集団の現状と課題」『福祉社会学研究』福祉社会学会，第８号：12-24.
————，2012,「過疎高齢社会における社会参加活動」光藤宏行編，『コミュニケーションと共同体』九州大学出版会，159-72.
高野和良・坂本俊彦，2005,「高齢社会における社会参加と生きがい」『山口県立大学大学院論集』第６号：89-99.
辻正二，2002,『大都市における福祉ニーズと高齢者処遇の研究』平成11年度 -13年度科学研究費補助金研究成果報告書，山口大学人文学部.